

平成 22 年 05 月 22 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19560649  
 研究課題名（和文）近代上海租界地における日本租界の形成過程と空間構成に関する研究  
 研究課題名（英文）THE FORMATION OF SETTLEMENT IN SHANGHAI AND THE SPATIAL STRUCTURE OF JAPANESE CONCESSION AREAS  
 研究代表者 大場 修 (OBA OSAMU)  
 京都府立大学・生命環境科学研究科・教授  
 研究者番号：20137128

**研究成果の概要（和文）**：本論は上海租界の都市形成過程を踏まえつつ、近代上海における日本人居住地の形成過程と空間的特徴を、英、米、中との国際関係の中で明らかにした。まず、1840年代から、イギリス人は、租界として開発された以前の上海に存在していた河川、村道を生かしながら、土地、道路を開発していたこと、及び下水道の建設過程を明確にした。次に、日本が独自の居留地を諦め、租界全域に渉る都市開発権を得た過程を辿った。日本は英米施設との立地関係、交通条件や地価等に応じた都市施設配置を進めたが、結果として上海の日本人居住地の確保は後回しにされた実態を明確にした。一方、日本人居住地では、英米が供給する里弄住宅を主体とする借家居住に終始したことを、租界外の北四川路地区の住宅遺構等の調査を通して示した。その住宅形式は洋風ではあったが、畳を持ち込む等の動向もそこに読み取った。

**研究成果の概要（英文）**：This research focused on the urban development conducted by English and Japanese in Shanghai and made the urban progress of Modern Shanghai clear. First, the authors found that English developed their land and road on the basic of footpath or creek which existed in old Shanghai before it was developed as a foreign settlement. Then, Japanese government and companies advanced into Shanghai after the NISHIN battle. But Meiji Japan was forced to abandon founding the “Shanghai Japanese settlement”, the rights for urban development in Shanghai were obtained by negotiating with the Chinese government. In fact, the Japanese considered location, traffic conditions, and land values and they succeeded in their planning of urban facilities in the Shanghai Settlement. But residence couldn't be constructed. Therefore, many Japanese lived in North Szechuen Road area, which was far from the settlement area. This study demonstrates that in order to create Japanese-Style life, Japanese always took “TATAMI” into their homes although they rented from English owners.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：都市史・建築史

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：上海・租界・日本人街・居留地・里弄住宅

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景は以下の3点を取り上げることが出来る。

(1) 日中学界における上海の都市建築史研究の問題点 従来の上海を中心とする都市建築

史研究は、村松伸『上海・都市と建築』(PARCO出版、1991年)が注目されている。村松は、上海英租界の特異な都市景観、建築外観、及び上海で活躍していた西洋人建築家の設計活動を網羅的に記録した上で、上海事変(1937年)以降の

日本占領期を中心に、日本人建築家の設計活動や1942年大上海都心改造計画等を呈示した。一方、建築外観・空間への直接的な関心から、上海近代建築、特に大型公共・商業施設等を整理した資料は、中国学界の陳从重『上海近代建築史稿』(上海三聯書店出版、1988年)、鄭時齡『上海近代建築風格』(上海教育出版社、2002年)がある。これらの研究は、当時の上海における都市建設の状況を説明したものであるが、当時の上海を取り巻く国際社会の状況を十分に把握したものとはなっていない。

(2)近代日本人による海外での都市開発活動の実態に関する研究の問題点 この分野に関して、西澤泰彦は『海を渡った建築家』(紀伊国屋書店、1996年)において、旧満州を中心に、日本人建築家が設計した日本植民地建築の様式、材料、用途・機能に関する精密な分析を行い、さらには、日本の近代建築及び世界近代建築における日本植民地建築の位置付けと意義について検討した。都市計画史の分野でも、西澤は『図説 満州都市物語』(河出書房新社、1996年)において、日本の国策会社「満州鉄道株式会社」の都市開発活動に着目し、旧満州の大連、ハルピン、長春、審陽の都市計画、都市発展の過程を詳細に論じている。西澤の一連の研究は、近代日本人による海外での都市建築活動に関する代表作と言える。しかし、上海における日本人の都市開発活動については触れられていない。

上海におけるこの種の動向を把握しない限り、近代の日本人による海外での都市開発行為の全体像を把握することは出来ない。

### (3) 上海の伝統的市街地の状況

2006年において、筆者が初めて上海で実地調査を行った際に、旧上海バンドからやや離れた虹口地区の南部分にある旧日本人街は、まとまった状態で存在していた。しかし、その後の急速な再開発により、これら一帯は急速に取り壊されつつある。本研究は、まさにこのような再開発の波の中で開始された。

## 2. 研究の目的

本研究は、イギリス人と日本人による都市開発の実態から、近代上海に成立した国際関係の中で、上海租界の都市形成過程、及び都市基盤と建物より形成された上海の都市空間構成の解明を目的とした。

## 3. 研究の方法

目的に即して、本研究では近代上海に成立した英、日の国際関係に着目しつつ、英国工部局や日本の外務省および日英の民間事業者による都市開発とそれに関係する様々な外交交渉の過程とその実態を追求することに主眼をおいた。

そのために、日、米、中の史料館や図書館に所蔵されている都市計画史料及び外交史料(筆者が新たに発掘した)を駆使し、加えて上海での現地調査を重ね、イギリスと日本による上海での都市開発過程の把握とともに、最終的に形成された都市空間の特徴を探った。

主要な史料を以下に示す。

- (1)『上海道契』(1854-1948年) 上海図書館所蔵
- (2)『Minutes of Municipal Council』(1854-1948年) 上海档案馆所蔵
- (3)『Land Assessment Schedule』(1862-1948年) 上海档案馆所蔵
- (4)『支那各地帝国居留地設定一件』(明治28年-35年) 日本外交史料館所蔵
- (5)『清国諸港居留地関係雑件』(大正4年) 日本外交史料館所蔵
- (6)『清国上海領事館前面水上ヲ日本郵船会社ニ於テ借用請願一件』(明治21年) 日本外交史料館所蔵
- (7) 1849-1937年までの上海古地図史料

(1)～(3)からは、イギリス人、日本人による土地、道路、下水道計画の実態を検討した。(4)～(5)は、日本外務省及び日系企業による上海進出の実態が記録されていた。(6)からは、日本郵船会社による上海港での港湾施設の建設過程を把握することが出来た。

これらの史料を(7)地図史料と照合させることにより、上海の都市形成過程を明確にした。

同時に、都市開発の結果としての都市の実態空間および諸建築の特徴を明確にするために、上海租界の全域に渉る現場踏査を行った。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、以下の2点に集約できる。

### 4-1 イギリス・日本双方からの近代上海における都市基盤施設の建設過程とその実態を明確にした。

本成果は、本科学研究の主要な成果である。具体的には、(1)イギリスによる上海英租界の都市開発過程の解明、(2)上海日本居留地の設置活動から見る日本の上海進出の基本戦略の実態把握、(3)上海での都市開発活動と施設配置計画から見る日本の上海進出における空間構成、という3項目で構成される。

以下、各項目別に成果の概要を示す。

(1)上海開港(1843年)直後の1845年に設立された上海英租界の都市開発過程について、イギリスによる租界での道路・土地・下水道の都市基盤の整備過程を追求しつつ、上海租界におけるイギリスによる既得権の確立過程とその実態を明確にした。

イギリスによる上海租界開発の担当部門であ

る工部局は、上海の旧来の集落要素である河川、村道を足がかりに、河川の埋立てや村道の拡幅を図ることで、それらによる旧来の地理的条件を近代都市の街路システムの一部として編入し活用した実態を明確にするるとともに、それらの街路網が、現在も上海中心部の主要な交通網として機能していることを示した。

同時に、イギリスの民間業者による旧来の河川、村道に依拠した無秩序な土地開発が、工部局による上記の公道や下水道の整備に先行して進展した実態をも明らかにした。

これらスプロールの土地開発は、交通渋滞や汚水等の都市問題を引き起こしたことを示した上で、工部局による公共減歩や民間による事業費負担等のシステムの導入による、対応策の実態を明確にした。

以上より、イギリスによる、上海租界の道路・下水道・土地の開発、およびそれらの所有権と管理権の確立過程を明確にして、現代上海の母体となる租界地形成の一端を明らかにした。

(2) 日清戦争(1894年)以後、後発の日本が、上海租界地に如何に自らの拠点を作り上げたのか、日本による上海進出の過程とその意図と戦略を探った。その結果、上海日本居留地の設置を廻る日本側の動向、及び同時期のイギリスによる都市開発事業を詳細に捕捉し、日本の上海進出が直面した課題とその対応の具体策を明確にするるとともに、日本の上海進出の意図と戦略の変遷過程を明らかにした。

すなわち、1895年以降、日本は上海日本居留地の設置に向け、外務省通商局による候補地の選定と、政界・経済界を交えた議論の中で、日本居留地の設置条件として、「交通条件、港湾施設、買収する土地の地価、英米租界の拡張動向」を重視したことを明らかにした。

一方で、同時期の上海における英工部局による都市開発過程を明らかにすることで、日本の選定した居留地候補地が、当時すでに英米の租界の一部として編入されようとしていた実態を示した。

結果的に、日本が独自の居留地設置を断念し、イギリス人主導による租界拡張活動に従い、日本の希望地域を上海租界地の一部に組み込む策を取ったこと、ならびに上海租界内外における、港湾施設・造船場・工場の建設権利を入手するという基本戦略を定めたことを明らかにした。これにより、日本が「専管居留地」という枠組みを越え、上海全域に渉る都市施設の建設権利の入手に成功する。さらに、日本は上海日本居留地の設置権利をもって中国政府と交渉し、上海から江南諸都市間の水路交通網の整備権利を目指したことをも示した。

以上のように、本成果は、このような日本に

よる一連の上海進出過程、及び上海はあくまでも江南地域に進出するための拠点であるという日本の意図を明らかにした。

(3) 日本が上海で実際に行った都市開発活動を明確にした。日本による港湾施設の建設過程、および実践していた土地開発活動を明確にした。さらに、日本側の事業者により造られた都市基盤や建築物によって成立した都市空間の特徴とその意味を検討した。

まず、1888～91年の日本郵船会社による虹口港の港湾施設整備の過程を検討した。虹口港の棧橋・埠頭・倉庫等の整備を進めるには、水面使用権と倉庫や埠頭の面する道路使用権の獲得が不可欠の課題となる。そのために、日本郵船は交渉を重ねるも、工部局による強固な反対にあう。それに対し、日本郵船は虹口港における港湾拡張の必要性を訴えつつ、工部局の要求に応じた計画案の変更や道路・水面使用料金を支払うことで、工部局から水面・道路の借用権を得ることに成功し、虹口港の増築を実現した。以上の過程を経て、日本は上海港で港湾施設を確保したことを本研究は明らかにした。それは、日本による上海進出の第一歩を踏み出したことを意味する。

引き続き、日本による上海における都市開発と施設計画に関して、以下の3点を明確にした。

(1) 日本は、イギリス人主導の租界開発の進行状況に合わせて、あくまでも、新道路に沿って、自らの土地を取得していたことを、1890～1930年までの土地取得過程の的検討から明らかにした。それは、日本が都市開発費用の面で、道路開発費用が免れ、土地買収費用のみで済んだことを意味した。

(2) 日本はイギリス系所有地の合間を縫うように、目抜き通りのバンド沿いに横浜正金、住友、三井等の大手銀行、及び三菱物産、日本郵船、内外綿等の大手会社を設置し、そして、バンドから交通至便の虹口地区に日本人クラブ、東本願寺等の公共施設を配置、一方、内外綿、東洋紡等の大規模の工場は、イギリス人による開発が手薄な租界西東両端に配置させたこと等を、1930年上海租界における英米日の土地所有状況から明らかにした。ここで、イギリスと日本による上海での力関係は、近代上海の都市空間にも如実に現れたことを示した。

(3) また、これらの日本側の都市施設は、銀行・大手商社は地価の最も高い地区、大規模の工場地は地価の最も低い地区に立地させ、公共施設の配置は地価の中間域を選ぶなど、地価や開発費用を念頭にその施設配置が決定されたことを、1911年上海租界の地価分布図の作成を通して明らかにした。

以上より、日本がイギリスとのせめぎ合いの

中で、イギリス人の都市開発動向や開発費用のバランスを考慮しつつ、主に経済・生産活動に関わる商業、工場施設を、分散させつつも上海租界に持ち込んだその過程を明確にした。

明治末期から1930年代まで、日英における上海での政治、経済力の格差が上海の都市空間に鮮明に表れ、近代上海における「日本」は、日本の植民地都市である旧満州国、朝鮮、台湾とは異なり、英米との狭間の間に成立したことを本研究は明確にした。

本研究は、上海租界を廻る国際関係に着目しつつ、「外交交渉と都市開発」という独自の視点と方法から、イギリスによる上海の都市開発過程について、これまで不明であった上海の都市形成原理を解明し、時系列に沿って近代上海の道路・下水・路面電車等の都市構造を復原することにより、今日、急速に失われつつあるそれらの都市構造を明確にした。

さらに、これまで解明されていない1894年日清戦争以降から1937年上海事変までの間において、日本による上海進出の過程を明確にした。特に、日本郵船会社による上海での港湾施設の建設過程、及び上海日本居留地の設置を廻る日本側の選地・土木調査・現場視察・外交交渉等の各種活動の中に現れた日本の戦略意識と行動、及び最終的に日本の港湾・商業・公共等の施設配置計画の中に現れた日本の空間戦略という新たな事実を浮き彫りにした。

本論により、近代上海の都市と建築を論じるには、イギリスのみ又は日本のみという偏った視点からは不可能であることを示した。それ故、本論文は、日本の海外都市、建築史及び中国の近代都市建築史研究に新たな枠組みを提起しえた。さらに本論は、上海租界に関する例年の地図及び地籍図の精密な復元作業により、今後の上海都市史研究及び都市計画に貴重な資料提供をし得たと考える。

#### 4-2 北四川路地区を中心とする日本人住宅地の空間構成、及び上海旧日本人国民小学校の形成経緯を把握して、上海における旧日本人街の実態を把握した。

上海虹口地区の日本人街は1920年代に外郭がほぼ完成し、その後の日本人の急速な増加に伴い、学校や商店が進出した過程を本研究は明らかにするとともに、1940年代における虹口地区が日本の街と変わらない諸施設が整い、日本人街と呼ぶに相応しい構成をとっていたことを明確にした。

しかし、日本人専用の住宅はあまり開発されなかったこと。多くの日本人は欧米人が開発した里弄やアパートで生活し、その生活スタイルは洋間での一足制を基本とするものであったこと。生活する上で、畳を持ち込み、床座生活との折衷に切り替える家庭が多くあったこと。日本の建築家も住宅設計に際し

て、異国の地の住宅構成、生活スタイルを学び、当初は日本とは違った洋風の生活スタイルの構築に意欲を示したこと。しかし、畳生活に固執する多くの一般邦人との間で妥協を余儀なくされたこと、などの諸点を本研究は明らかにした。

欧米文化が入り、当時日本よりも圧倒的に国際都市であった上海において、一般市民も建築家も欧米に憧れを抱きつつも、日本人に対応した新たな生活スタイルを模索した。しかし、異国の新天地でも畳は日本人の生活から切り離すことは出来なかった状況を本研究は示した。

本研究は、上海旧日本人街における邦人の居住様式の実態とその変遷の一端を捉えることで、10万人を超える邦人が居住していた上海での住生活状況が、日本の近代住宅史に新たな頁を添える意義をもつことを明確にした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### 【雑誌論文】(計6件、すべて査読有)

- 1 陳雲蓮・大場修 「上海共同租界における日本人による都市開発過程と施設配置の実態」『日本建築学会計画系論文集 No.654』第75巻 2010年8月(掲載決定)
- 2 陳雲蓮・大場修 「近代上海港における日本郵船会社による港湾施設建設過程」『日本建築学会計画系論文集 Vol.74 No.643』pp.2125-2131 2009年9月
- 3 陳雲蓮・大場修 「1890-1910年代における上海旧日本人街の形成背景—近代上海旧日本人街に関する都市史研究その1—」『日本建築学会計画系論文集 Vol.74 No.641』pp.1691-1697 2009年7月
- 4 陳雲蓮・大場修 「1854-66年における上海英租界の道路、下水道整備過程」『日本建築学会計画系論文集 Vol.73 No.633』pp.2533-2538 2008年11月
- 5 陳雲蓮・大場修 「1849-66年間ににおける上海英租界の道路、土地開発過程」『日本建築学会計画系論文集 No.622』pp.239-244 2007年12月
- 6 陳雲蓮・大場修 「開港初期における上海英租界の都市形成過程に関する研究」『日本建築学会関東支部審査付研究報告集 Vol.2』pp.81-84 2007年9月

##### 【学会発表】(計7件)

- 1 陳雲蓮・大場修 「近代日本による上海進出の基本方針」『2009年度日本建築学会大会(東北)学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』pp.287-288, 2009年8月
- 2 越桐咲子・大場修 「上海における旧日本人学校に関する史的的研究」『日本建築学会近畿支部研究報告書』第49号、pp.921-923, 2009年5月
- 3 陳雲蓮・大場修 「1890-1910年代における上海日本人居住地の形成背景」『2008年度日本建築学会大会(中国)学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』pp.367-368, 2008年8月
- 4 笹井友梨・陳雲蓮・大場修 「上海虹口地区の旧日本人街における空間構成と居住形態」『2008年度日本建築学会大会(中国)学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』pp.229-230, 2008年8月
- 5 笹井友梨・陳雲蓮・大場修 「上海虹口地区の旧日本人街における空間構成と居住形態」『日本建築学会近畿支部研究報告書』第49号、pp.921-923, 2009年 pp. 897-900, 2008年5月
- 6 陳雲蓮・大場修 「1855-66年間ににおける上海英租界の道路、下水道計画過程—開港初期における上海租界の都市形

成に関する研究-』『2007 年度日本建築学会大会（九州）学術講演梗概集 F-1 都市計画』 pp.1357～1358, 2007 年 9 月  
7 陳雲蓮・大場修 「開港初期における上海英租界の都市形成過程に関する研究」『2006 年度日本建築学会関東支部(東京)学術講演梗概集』, pp.357～360, 2007 年 3 月

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等：なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大場 修 (OBA OSAMU)

京都府立大学・生命環境科学研究科・教授

研究者番号：20137128

### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：

